

まえがき

労働する身体と娯楽を消費する身体とは不可分の、あるいは表裏一体のものである。体制側は身体を良好な状態で継続的に動員するために、コントロールしつつ娯楽を与え、娯楽は発達し、ときには体制の意図の外側へはみ出ていく。では動員が解けたあと、娯楽を享受する身体は何を求め、多量に生産された娯楽はどこへいくのか。

本書は、二〇二二年度国際日本文化研究センター（日文研）の共同研究「労働と身体の大衆文化論——戦時下・戦後の接続の試論として」（研究代表者・大塚英志〔日文研〕・星野幸代〔客員〕）の研究成果であり、出版に際し日文研の助成を受けたものである。二〇二二年度は「ミチコロナ」が唱えられつつも年度内に新型コロナウイルス感染症流行のピークが数回生じ、三回の研究会がいずれもオンライン開催となった。システム操作に精一杯で、総合討論が充分でなかったことが、個人的な反省点である。以下に、研究会の記録を挙げる。（敬称略）

第一回 二〇二二年七月三〇日

報告① 星野幸代「戦前戦後日本の少女文化におけるバレエ」

報告② 孫旻喬「機械が『労働する身体』として語られる時…造形・ジェンダー役割・人間との関係」

報告③ 河西秀哉「労働者が歌うこと——厚生運動からうたごえ運動へ」

第二回 二〇二二年九月三日

報告① 陳敏「外地巡礼と満洲の働く少女」

報告② 秦剛「戦時下の木蘭故事の舞台化——東宝国民劇『木蘭従軍』をめぐる」

報告③ バラク・クシュナー (Kushner, Barak) 「Transwar propaganda and entertainment: imperial to post-imperial considerations」

報告④ 徐瑋瑩「跨越高雅與通俗文化的藩籬：二戰前後日本舞蹈藝術界對臺灣的影響 (1920-1967)」

報告⑤ 朴祥美「戦後日本の文化政策と大衆芸能」

第三回 二〇二三年三月四日

報告① 佐々木浩雄「帝国日本と集団体操…満洲への拡張」

報告② 小川翔太「囚われ・越境する日本軍政下インドネシア POW Camp 宣伝映画——(脱)植民地化へ動員されたシネアストたち」

報告③ 瀧下彩子「『はれもの』にさわる子供たち——児童文化は新中国をいかに消化したか」

ゲスト・コメンテーター…晏妮 (日本映画大学)、魏晨 (武漢大学)

本研究班は、翼賛体制下における身体と視覚を通じたプロパガンダ大衆文化の担い手が、終戦後さして休止もせず活動し、次世代を育成したことに着目し、戦時から今日につながる身体的・視覚的大衆文化のこうした軌跡を探ることを目的とし、多ジャンル横断的に(舞台芸術、大衆芸能、合唱、視覚的・聴覚的メディア)、また多様なルーツの研究者により議論してきた。メンバーのうち、バラク・クシュナー氏が諸般の事情で執筆を断念せ

ざるを得なくなつたのは非常に残念であつた。クシュナー氏は帝国日本の戦時プロパガンダにおいて特に漫才や落語等のコメディが極めて重要な役割を果たしたことを明らかにしてきたが、本研究会での報告ではそれを踏まえて、戦時慰問における大衆芸能と製薬会社の接点へと対象を広げつつ、敗戦後、ユーモアが戦時期の忘却に果たした役割が示唆されていた。

戦中戦後のいくつかの事象の連続性については既に検討がなされてきた。大衆文化については、大塚英志編著『動員のメディアミックス——〈創作する大衆〉の戦時下・戦後』（二〇一七年）における、翼賛体制下プロパガンダ戦略を担ったメディアミックスの上に現在のメディア芸術の達成があるという指摘が、本共同研究の動機の一つである。同年に出版された朴祥美『帝国と戦後の文化政策——舞台の上の日本像』（岩波書店、二〇一七年）には、日本の演劇界の戦中戦後の連続性について、次のように述べられている。「戦争協力から左翼運動へと、多くの文化人がとつた、状況に対して無節操にも見える行動は、戦前・戦中と一貫するいわば一つのスタンス——演劇の社会的貢献に努める——によっていくらかでも方向が転換できるのであつた」（九八頁）。この指摘は、「演劇」を「舞踊」「合唱」「映画」等に置き換えても通じるであらう。

このように、文芸界において広範な現象でありながら、大衆文化のジャンルによつては未だその連続性が忘却され、あるいは言及されない。その背景にある事情として、サブカルチャー研究史の若さという原因以外に、次のようなケースが挙げられるだろう。（一）作品や現象を、当時の特殊な文脈を再現した上で解釈しなければ、包含される意味が十分に認識できない場合。（二）師弟関係を主とする芸能において、戦時期の師の活動を負の要素と判断した門下生が資料を秘蔵している場合。（三）ある文化現象が（今日では）知名度の高くない個人の強烈な個性に依拠している場合、等である。本書収録のいくつかの論文は（一）から（三）のような理由で不可視化されていた現象に迫っている。さらに本書収録のいくつかの論文は、戦時期のトランスナショナルな文化記憶・人的交流がポストコロナ状況下で、民族的アイデンティティの模索と交渉しつつ如何にして潜伏し、浮

上していくのかという発展的課題に対しても展望を示した。さらなる課題として、本テーマには朝鮮・韓国、東南アジアに関する知見と議論が必要である。

研究会にてゲスト・コメンテーターを務めて頂いた晏妮先生（日本映画大学）、魏晨先生（お茶の水女子大学）、また本書の刊行に当たり台湾関係の研究論文にご助言いただいた三須祐介先生（立命館大学）には、いずれも貴重なコメントを賜り、改めて感謝申し上げます。研究会がつつがなく運営できたのは、オンラインでの確に日中通訳をしていただいた薛梅氏（中国、太原理工大学）と鄒韻氏（中国、杭州師範大学）、また通訳補佐とレジュメ翻訳に奔走してくれた名古屋大学大学院生の龔月婷さんと岸川あゆみさん、および協力してくれた皆さんのおかげである。

最後に、本研究のカウンターパートを引き受けて頂いた大塚英志先生と、本書の刊行を快く承諾して頂いた水声社および担当編集者の廣瀬覚氏の御尽力に深く感謝申し上げます。

二〇二三年盛夏

星野幸代